

特集

# 奈良でいけい。

— 奈良県立大学生39名が描く「奈良」

編集者緒言

《編集・中島敬介》

平成最後の正月あたりから、奈良イメージの「解凍」に取り組みました。解凍だから、破壊しようと企んでいるわけではない。変更を狙いとしたものでもない。まして新たに創造しようなどと、大それたことは考えていない。ただ「柿食えば・鹿・大仏さま・大鳥居」的に、がちがちにフリーズした感のある奈良のイメージに、もう一度温かい血を通して、蕩かしてみようと思ったのだ。地方の時代ともて囃されて―あるいは突き離されて―ずいぶん時が経つが、いまだ自立はおろか、降りかかる火の粉も自分で払えない。地方が抱える課題は、そもそも国家や中央政府の案件ではない。マクロな存在にミクロの悩みなど伝わるはずもないのだ。ミクロはミクロ同士、地方の歴史と風土に培われた多様な「知」を、お互いに融通しあうのが「地方の問題」解決の適正かつ早道の手段ではないか。



この実に「まつとう」なーと思われるー考え方に立ち塞がるのが、「知」の品質保証の問題である。地域アイデンティティ認識の問題と言い換えてもよい。他の地は知らず、奈良は歴史的にー地勢的にもー「大きな物語」を持つている。今、あらためて奈良の「知」の本質は何であるか、その源泉をどこに求めるべきかを自分自身の内部に探ってみても、大昔につくられた、たった一つのーしかも、手に余るほどー大きな物語しか見あたらない。奈良の弱点は、「日本最初の首都」にまつわるコンテンツ（ヒト・モノ・コト）以上のものがー少なくとも目立つかたちではー一つくられてこなかったところにある。「頭突き」しか技のないプロ・レスラーが、場面や相手に見境なく、天性の恵まれた石頭を遮二無二ぶつけていくように、奈良は、いつでもどこでも・だれにでも、あるときは胸を張って、別の時には含羞<sup>はにか</sup>みながら「日本人の心のふるさとーまほろば」とー呪文のようにー唱えてきたのである。

その呪文が、個々の「期待」を胸に奈良を訪れるーあるいは一時的・短期的に居住するー他者に作用すると、観察や思考に先立つ奈良イメージ形成の所与となった。奈良に対する他者のー本来は多岐多様であったはずのー期待は、「奈良ーまほろば」の磁場に絡め取られてモノトーン化し、各々の「期待」の部分だけがー正と負の両方向にーデフォルメされて、しかもうんざりするほど大量にかつ繰り返されて、奈良のものには自尊と羞恥をー極端なかたちでーかきたたせる「奈良イメージ」として、固着していったのである。自分（奈良）とは何者かの答えを内部に見いだせないものは、そのような「他者の表現物」で代替するしかない。「奈良ーまほろば」の呪文は、絡め取った他者を經由して再び奈良に回収され、返って

奈良の「アイデンティティ」を侵蝕し、奈良に取り憑いたのである。その結果、アイデンティティに根ざす奈良の「知」の本来まで、見えにくくしてしまった。

「まほろば」とは「真秀場」とも「真秀等間」とも書かれ、「素晴らしき土地」を意味する。もちろん、首都と素晴らしきはイコールしないが、少なくとも「まほろば」の一般的感覚は「首都」と結びついている。「まほろば」は、日本最初の首都・奈良に相応しい「美称」とも言えるが、しかし奈良が首都であった時期は、飛鳥時代を含めても120年足らずしかない。奈良が首都（宮処）となる以前はさておき、それ以後だけでも1500年を超える奈良の歴史時間の中で、「奈良ーまほろば」の時代は、10%にも満たないのである。8世紀の終わりに、咲く花の匂うが如き「都／宮処（みやこ）」が消滅し、その1300年後に忽然と今日の奈良が出現したわけではない。1000年もの長きにわたって、奈良は「地方」の一都市として維持され続けてきたのだ。さればこそ、飛鳥・奈良時代の事物・文物ーさらに、正倉院宝物に見られる漆器や筆管の技術までもーが現存しているのである。こういう都市は他にあるのだろうか。奈良の「知」の本質は、内外の最新テクノロジーを結集して形成された「まほろば」時代の奈良のコンテンツー「主語」ーではなく、それらをほとんどそのままの状態<sup>じょうたい</sup>で維持・継承・活用している、言い換えれば奈良のコンテンツをコンテンツたらしめている、その方法ー「述語」ーにこそあるのではないか。

これまでの奈良のイメージはー分かり難い喩えになるがーモーターショーに出品されるプロトタイプ・カーのようなものだ。理想的ではあつ

でも、このままでは公道を走れない。「夢の車」を諸々の規格や基準に適合した市販車とするには、不具合な部品を入れ替え、不足するパーツを補い、余分なものは取り除いていくプロセスが必要だ。奈良のイメージもコンテンツをいじくるのではなく構成する諸要素や形成のプロセスをリベース・エンジニアリング的に分解・解析し、組み立て直すことができれば、理想の奈良プロトタイプから現実の奈良アイデンティティに転位するのではないか。他地域にも融通でき、実践的に適用可能な―普遍性を有する―奈良の「知」とは、そのような奈良の―イメージではなく―アイデンティティに基礎を置くものであるはずだ。

奈良のヒト・モノ・コトが創り出す「知」を必要としているのは、奈良のものや奈良ファンと呼ばれる、すでに奈良にどっぷり浸っている人たちではない。むしろ奈良の「外側」において、まなざしを奈良に向けてきたもない人たちである。しかし、著名な書籍やビジュアルに描かれてきた奈良は、自分を愛するものだけを見て、讚美するものにだけ心を開いている。あるいは逆に、厭う言葉に背を向け、貶す声に耳を塞いでいる。どちらの奈良も「今日の世界」に全く関心がないかのように、日本の中心で凝<sup>じ</sup>つとしている。

本来の奈良には、この時代の動きがどのように映るのか。どんな知識や実践を社会に提示できるのか。奈良がフリーズして動かないのなら、われわれの方から奈良の解凍に動きだすしかない。これが、冒頭に述べた「奈良のイメージを解凍する」の本意である。

従来語られてきた奈良のコンテンツの「述語を換える」には、大別すると2つの方法がある。一つは、超有名な「奈良本」の語り口を、その陰に隠れたややマイナーな「奈良本」の述語に入れ替えるやり方で、これは本年2月に開催した「奈良のイメージを解凍する。」という、気持ちをそのままタイトルにしたシンポジウムで行った。

もう一つは、語り手を「そっくり」変えてしまう方法である。本特集は、これを実践したものだ。語り手は、博識な評論家でも学者でもない。表現のプロである小説家でもなければ、写真家でもない。公立大学法人奈良県立大学地域創造学部の学生、39名である。全編を掲載するには紙幅が足りない。やむなく39のレポート全てから、部分的に抜粋・引用し、編集させていただくことにした。学生諸氏はまた、5冊の奈良関連本を読み（「五読／ごどく」）、県内5カ所にも足を運んでいる（「五訪／ごほう」）。本特集末尾に掲載した一覧表がそれである。

本稿には『古寺巡礼』や『大和古寺風物誌』などに描かれた事物・文物と―当然ながら―重なるところも多いが、その視点や関心の傾きは、全く異なっている。あるいは、そのアングルに「これが奈良か」と訝しく思う向きもあるだろう。そこで、予めこうお答えしておいた。

「奈良ですけど。」